日本IBM ThinkPad 元開発部長

M A K O T OYASHIRO



ょうか。

他国と同じものを日本で作

ストがかかるのではないでし

などは日本でしか生産できなか います。 しかし当時バッテリー ればコストは割高になってしま

ですか。 ックPCの開発に着手したの 非常に高く、小型化が求められ ュアライゼーション)の技術が の強さを生かせる分野だったの るノートブックPC開発は日本 眞 日本は当時小型化 (ミニチ しかし日本で開発するとコ 日本IBMはなぜノートブ 製作者: 4年A組32番 屋代 顕 場所:屋代家自宅 日時: 2/1/'03 19:30~19:51 10 年前にくらべて驚くような進化 を遂げたノートブックPC。その開 発の裏ではどのような苦労と努力 があったのでしょうか。ノートブッ クPCの開発についてインタビュ ーしました。

ソフラある。

たのです。 発・生産を行っても優位性があっったものもあったため、日本で開

ThinkPad を開発しましたか。
ThinkPad を開発しましたか。
ThinkPad を開発しましたか。
バッテリーライフの短さが一番
バッテリーライフが長くなるよ
バッテリーライフが長くなるようなノートブックPCの開発が
重要でした。あとは重さで無いとノ
ち運びが可能な重さで無いとノ
トブックPCの意味が無いの
トブックPCの意味が無いの

かかえていたのですね。 |眞 どの会社も同じような問題を|か。

テリーで開発競争を行っていま会社もCPUや磁気ディスクは会社もCPUや磁気ディスクは会にかく最先端のものを搭載し、とにかく最先端のものを搭載し、とにかく最先端のものを搭載しています。だからどの制しが、大きさ、重量などの制量がから、大きさ、重量などの制量がある。

IBMはその問題をどのよう

にして解決したのですか。

真 バッテリーを例に挙げると、専門の企業により良い性能のバッテリーを開発してもらい、その性能を最大限に引き出せるように努力しました。ニッカドからニッケル水素、リチウムイオン電池と進化し、格段に電池の性能が上と進化し、格段に電池の性能が上らすー無駄を少なくするというらすー無駄を少なくするというところで競争力をつけて行きました。

・どのような工夫をしたのです

ます。

した。
した。
した。
した。
した。
低消費電力の部品を開発し
真
低消費電力の部品を開発し

その結果はどうでしたか。

耐久性や薄さがより強く求めら求を満たすようになると、今度はに満足頂けるレベルになっていに、カスをはの要がある。

の技術が向上したことだと思いて大きな進化を遂げましたが、 その一番の要因はなんですか。 真 バッテリーの進歩もありますが、あらゆる電化製品に対してましたが、のよりをですが。

だと考えていますか。に求められることはどんなことこれからのノートブックPC

クPCは、ワイヤレスの通信機能もデスクトップでなきゃいけならデスクトップでなきゃいけならデスクトップでなきゃいけならデスクトップでなきゃいけならが、普通に使う分には型と変わらず、普通に使う分にはの性能もほとんどデスクトップの性能もほとんどデスクトップ

を始め持ち運びをしたりいつでを始め持ち運びをしたりいつでを始め持ち運びをしたりいつで

プロフィール 屋代眞(やしろまこと) 1952 年東京生まれ 97年から01年まで日本 I B Mで ThinkPad の 開発責任者を務める



私が小学校二年生の時からお世話に なっている、ピアノの先生、岡本ひ とみ先生にインタビューしました。

(04年2月1日 15:30~ 藤沢市内、先生のご自宅にて。)

Q:ピアノはいつから始められましたか?

5歳の時です

Q:始めたきっかけとかはありましたか?

女の子、ということで父が将来も趣味として続けられるようなものとして 美術か音楽をやらせようと思ったみたいで。当時は昭和30年くらいだっ たので今ほどピアノは誰もがやっているというわけではなかったのだけ ど、たまたま近くにピアノを教えている方がいらしたから始めることにな ったみたい。初めのうちは家にもピアノが無くて…いまじゃ信じられない ような話だけど、紙鍵盤で練習していたのよ(笑)でも小学校に入った年 かな?おばあちゃんが当時で言ったらすごく高かっただろうにアップラ イトのピアノを買ってくれたの。

Q:やめたいと思ったこととかはありましたか?

子供の頃は体が弱かったから、外で遊びまわる、ということもたくさんはできなかったし、今のように娯楽も発達していなかったから、やることといえば大好きな読書、ラジオを聴くこと、それからピアノ…という感じで。まだ子供だったから好きか嫌いかもよくわからなかったけど、何となく楽しいと思っていたから、親に「やめる?」って聞かれたら「ううん」という感じでしたね。

そして、小学校二年生の時に父が、知人の娘さんがピアニストであることを知って、その方に教えていただくようになったんです。始めに習っていた方は声楽が専門だったので、指の形とかは全然注意されていなくて...最初、先生は(弾き方に)びっくりされたみたい(笑)

その二人目の先生というのは相愛大学の講師もしていらしたので、「ちゃんとやりたいのなら…」と勧められて、あまり良くわからないままにそこの音楽教室に通うことになったんです。

そこでは聴音やソルフェージュなどを、まるで塾みたにクラス分けをして やっていて…上のクラスにあげてもらえたりするとやっぱりうれしくて、 すごく励みにもなってましたね。

だから体を崩して、学校を休んでしまうことはあっても、週三時間の音楽 教室には40分くらい掛けて通っていましたね。

Q:芸大の高校に進まれたわけですが、自分からみるとすごく早い時期の選択のように思います。迷いはありませんでしたか?

他のことをやっていたら迷ったのかも知れませんね。でも、後に引けなくなっていった感じもあったのかな…?(笑)中学生になったとき、本格的にピアノをやりたいのなら一度東京の先生(岡本先生は大阪ご出身)に見てもらった方がいいと先生に勧められて、行ったんです。 うまくなりたいな…という気持ちもあったと思いますけど「東京」への憧れもあって、(始めの一年くらいは新幹線も無かった中)通うことになったんです。

そうしたらその先生の生徒さんはみな、芸大・桐朋を目指す方ばかり、という感じで、自分自身も一生懸命やる限りは受かりたいな…という気持ちになってゆきましたね。

Q:受験、一人暮らしとかはやはり大変でしたよね?

そうですね。受験はやっぱり大変だったから、もう二度とはしたくない…って感じかな。(笑)でも一人暮らしは先輩・後輩と同じアパートで、とにかく自由だったし楽しかったですよ。一学年は40人くらい、ととても少なくて、ピアノ科もたった10人くらいしかいなかったんだけど、みんな才能・個性のある人ばかりで「自分にはやっぱり才能無いな…」と思ってしまったこともあったけど、すごくいい刺激を受けましたね。

Q:ウィーンへの留学にはなにかきっかけがありましたか?また向こうの学校ってどんな感じですか?

親が大学卒業後の二年間なら自由に使っていいと言ってくれて、大学院に行くか留学するかのどちらかということになって、憧れだった留学をすることにしました。そして高校の時から選択していたドイツ語の国、ということで知り合いの先生を通してウィーンへゆくことになってゆきましたね。

むこうでの生活もすごく楽しかったです。日本人も割と多かったし、教養課程のようなものは日本で終えていたのでピアノのレッスンを受けて、先生や門下生のコンサートを聴いたり と専門学校的な感じだったかな。

Q:好きな作曲家とかいらっしゃいますか?またその理由なども。

どの作曲家も好きですけど、モーツァルトが一番好きですね。あとバッハ。ショパンも弾いていて一番気持ちいいです。モーツァルトは本当に才能のあった人だと思う。もちろんベートーベンとかもだけどね。でもモーツァルトの場合、推敲に推敲を重ねる ということをせずに頭の中に、譜面を書くのが間に合わないくらいに曲が浮かんできたと言うのだから、本当に才能とは思わずにはいられないよね。しかも一見単純そうで誰もが思いつきそうで、思いつけないメロディー 本当にすごいとおもいます。若い頃にはパワフルなリスト等も好きだったけど、体力的にこれからも弾いて行けそうなモーツァルトを勉強し続けてゆきたいですね。



-365

-365

-86

…と先生ご自身の目標を語っていただいて終わった今回のインタビュー。すごい経歴をお持ちなのに、いい意味でそんなことを感じさせない…人間的にもほんとに素敵だな、と思います。 残念ながら紹介しきれない部分も出てしまうくらいにたくさんのお話を聞かせていただいて、改めてすばらしい先生に教えていただいているんだと実感できたインタビューでした! 《先生のコメント》

インタビューというより、ただ思い出を語ってしまった気がするのですが、両親や家族があっての自分というのをこれからも 忘れずに楽しんでゆきたいなと思います。

岡本ひとみ先生

S48 東京芸術大学卒

S50 ウィーン国立音楽大学卒

現在 昭和音大講師

インタビュー感想

父(屋代眞)の感想

人から話を聞きだし全体をひとつのストーリーにまとめるという訓練はとても大切なことでよい企画だと思います。今まで本人が知らなかった分野の内容を聞き出すということでてこずったり、うまく突っ込めなかったりというところも感じましたが、聞いた話をうまくまとめて、市場、技術、とお客様の変化と製品企画の移り変わりを捕らえているのではないかと思います。

自分(屋代顕)の感想

今回のインタビューでは予め質問内容などを考えて、順を追って聞いていく予定でしたが、実際にはなかなかインタビュー相手を思い通りの話の方向にむけることができませんでした。これはおそらく僕の質問の幅が広すぎた、もしくは曖昧だったためインタビューされる側がどんなことを答えていいのかわかりにくかったからだと思います。次回このような機会があったら、より具体的で細かな質問をするよう心がけ、自分が相手から何を聞き出したいのかを相手にわからせるような内容のインタビューができるようにしたいと思います。

今回のインタビューで、パソコン開発専門の人(父親)に話を聞くことにより、普段は知ることのできないノートブック PC 開発の裏側をしることができました。ノートブック PC の開発といえば、ただ漠然とすべてを小型化するというイメージしか持っていなかったのですが、実際には時代や消費者のニーズの移り変わりによって、常に開発の目標が違うってくるということがわかりました。特に「客の要求がある程度満たされると、開発目標が変わってくる」ということに、研究開発の難しさというものを感じました。インタビューでは普段なかなか知ることができない部分を知ることができ、また自分から聞きたいことを質問できるとてもいい方法なので、今後の調べものなどの活動などに積極的に活かして生きたいと思います。

画像サイズ変更

使用ソフト: PhotoShop

1ページ目左側の画像 元画像ファイルサイズ 410KB 圧縮後ファイルサイズ 36.8KB 2ページ目左下の画像 元画像ファイルサイズ 422KB 圧縮後ファイルサイズ 22.8KB